

台灣日語學習者音聲轉訛形的使用狀況

-以丁寧體的會話資料為本-

羅濟立

東吳大學日本語文學系副教授

摘要

日語的口語中存在著不少所謂的「音聲轉訛形」，亦即意義相同的詞句卻有複數的相異音形。本研究參照日本人母語話者的資料，考察了丁寧體會話中台灣日語學習者音聲轉訛形的使用狀況。

研究結果發現：在 A 類（母語話者的使用基本上以轉訛形為主（90% 以上）的一群）和 D 類（母語話者轉訛形的使用率非常低（0%~5% 程度）的一群）兩類中，台灣學習者的使用狀況幾乎與母語話者相同。但是在 B 類（母語話者的轉訛形超過或和原形相同（50%~80% 程度）的一群）和 C 類（母語話者轉訛形的使用率比原形低（15%~40% 程度）的一群）兩類中，台灣學習者的使用出現一些與母語話者差異較大的項目。因此，教師必須加強在 B 類和 C 類轉訛形的指導。

關鍵詞：音聲轉訛形、原形、丁寧體會話、使用率

受理日期：2014.08.28

通過日期：2014.10.24

The Usage of Transformed Sounds among Japanese Learners in Taiwan — Focused on Polite Style Conversations —

LUO JiLi

Associate professor, Department of Japanese Language and Culture,
Soochow University

Abstract

In Japanese spoken language, there is one thing named 「transformed sounds」, it means the same words and phrases can appear with forms of different sounds. This research refers to Japanese native speaker's data, to see the usage of transformed sounds in polite style conversations among Japanese learners in Taiwan.

The result shows, Japanese learners have almost the same usage with native speakers in Type A (Type A is over 90% of transformed sounds used by native speaker) and Type D (Type D is between 0% ~ 5% of transformed sounds used by native speaker); on the other hand, Japanese learners have different usage with native speakers in Type B (using percentage of transformed sounds exceeded the original form / or have the same proportion (50%~80%)) and Type C (using percentage of transformed sounds does not exceed the original form (15%~40%)). This suggests that it is very important thing to teach how to use transformed sounds of type B and type C well.

Key words: transformed sounds, the original forms, polite style conversations, usage rate

台湾人日本語学習者における音声転訛形の使用状況

－丁寧体の会話を中心に－

羅濟立

東呉大学日本語学科准教授

要旨

日本語の話し言葉においては、いわゆる「音声転訛形」、即ち同一と認められる語句が異なる複数の音形を持って現れるというものがある。本研究では日本人母語話者のデータを参照しつつ、丁寧体基調の会話における台湾人日本語学習者の音声転訛形の使用状況を考察してみた。

その結果、A類（母語話者による転訛形が基本（90%以上）であるもの）とD類（母語話者による転訛形の使用率が非常に低い（0%～5%程度）もの）とでは、学習者は母語話者とほぼ同様の使用状況となっているが、B類（母語話者による転訛形が原形を上回る／同程度（50%～80%程度）であるもの）とC類（母語話者による転訛形の使用率が原形を上回らない（15%～40%程度）もの）とでは、母語話者の使用状況とずれる項目が多いということが明らかになった。特にB類とC類の転訛形を効果的に使用できるよう指導することが大切であることを示唆している。

キーワード：音声転訛形、原形、丁寧体の会話、使用率

台湾人日本語学習者における音声転訛形の使用状況

-丁寧体基調の会話を中心に-

羅濟立

東呉大学日本語学科准教授

1. はじめに

日本語の話し言葉においては、いわゆる「音声転訛形」、即ち同一と認められる語句が異なる複数の音形を持って現れるというものがある。「てしまう→ちゃう」などの縮約形と「やはり→やっぱり」などの拡張形が挙げられる。音声転訛形がインフォーマルな場面だけでなく、フォーマルな場面でも頻繁に現れる。つまり、音声転訛はどれも一様に与えた印象を与えるわけではないのである。しかも、例えば「では」が「じゃ」と変化する現象において、名詞に後続する場合、接続詞の場合、否定が続く場合のように、同様の変化をしても文法的な違いによって使用率は異なり、改まり度に差が出てくるものもある（福島・上原 2004）。しかし、教室習得中心の台湾人日本語学習者（JFL: Japanese as a Foreign Language）はなかなか運用には至らないのが現状である。

一方、今まで音声転訛形に関する研究は、日本語母語話者の使用状況について調査したものが殆どであり、台湾人日本語学習者の使用状況について調査し、習得の状況及び指導の際の留意点について考察したものは見当たらなかった。または、学習者に音声転訛形を適切に使用させるためには、まず、学習者の使用の実態を調査する必要があると思われる。そこで、本稿では 37 名のデータを基に、日本語教育の立場から、丁寧体基調の話し言葉における日本語学習者の音声転訛の実態を調査することにした。台湾における日本語の音声教育や会話教育に役立てば幸甚である。

2. 先行研究

斉藤（1991）は「音節数の減少」「音数の減少」「音量の現象」のいずれかの音声的過程が認められた場合、その認められた方の形を「縮約形」と定義したが、福島・上原（2004）は原形に対する音

の変化には「減少」だけでなく、「増加（拡張形）」も見られるため、本稿では、縮約形と拡張形に当てはまるもの、さらに「なんと」が「なんて」となるように音節が変化するもの、つまり、「同一と認められる語（句）が異なった複数の音形を持って現れるもの（ボイクマン 2010）」を今回の音声転訛形の定義とした。そのもとの形を「原形」と呼ぶ。

これまで音声転訛形の研究はその数が少ないが、40 年ほど前からその重要性が指摘されている。土岐（1975）は先駆けとしてテレビの教養番組をデータとして縮約形の現れ方を調べ、正式な場面にも縮約形の存在が認められるため、日本語学習者が学習目標とする必要があると結論付けている。嶺岸（1999）は会話中心に教えるものと聴解中心に教えるものを区別し、縮約形指導の目安を設定した。

堀口（1989）はテレビとラジオ番組の発話データから日本人の縮約形の使用率を調べ、縮約形とその文法とを関連させながら日本語学習者の縮約形の指導に活かそうとした。福島・上原（2004）は、丁寧体基調の会話における転訛形の使用実態とその丁寧さについて、原形と転訛形の両者を調査している。堀口（1989）と福島・上原（2004）の研究を補完するものとしてはボイクマン（2010）がある。ボイクマン（2010）では丁寧体基調の会話における 40 名の日本語母語話者の転訛形について、それぞれの転訛形が原形と比べどの程度使用されているのか、そして転訛形によって改まり度にどのような違いがあるのかについて調査分析した。本稿ではボイクマン（2010）の研究結果に基づき、台湾人日本語学習者の転訛形の使用状況を明らかにしたい。

また、転訛形についての習得研究には東（2006、2008、2009）がある。東（2006）は初級・中級・上級・超級の中国人学習者を対象に、インタビュー会話コーパスを用いて調査を行った結果、中級以下の日本語学習者は縮約形の使用例が非常に少ないことが明らかになった。また、学習者自身は上級になっても縮約形をあまり使用しておらず、その使用率が母語話者よりかなり低いことが分かった（東

2008)。なお、東（2009）では中国の大学での日本語教育における縮約形指導の現状について調査を行い、縮約形は教材に文法項目として導入されてはいるが、運用に関する明示的な指導はほとんど行われていない。また、学習者は縮約形に関する知識はあり、より自然な日本語を話せるようになりたいと強く望んでいるが、運用能力は十分身につけていないことが明らかになった。しかし、これまで台湾の日本語教育における学習者の転訛形の使用状況や運用能力についてはあまり知られていない。そこで、台湾人日本語学習者の丁寧体の話し言葉をデータとして、本研究の調査の目的を、次の3点に置いた。

（1）丁寧体基調の会話データにおいて、どのような音声転訛が見られるのか。

（2）原形に対して、音声転訛形はどの程度使用されているのか。

（3）先行の日本人母語話者の使用データとの比較を行ない、台湾における日本語の教育現場へはどのような示唆が得られるのか。

3. 調査の概要

3.1 分析データについて

本稿では、「LARP at SCU コーパス」¹による縦断的資料の分析から作文を観察して得たデータを検討する。2004年3月から2007年5月までの4年間にわたる計画であった²。その内、日本語学習者37名をインタビューとして行われた会話データを調査対象とした³。インタビューデータは、教師のインタビュアーが被験者と一対一で作文の内容について確認、作文の不自然な点を気づかせる方法でインタビューを行なったものである。インタビューの男女の内訳は、

¹ LARP at SCU (Language Acquisition Research Project at Soochow University) については、陳（2005、2006）または <http://www.larpat scu.org> に詳しい。

² 大まかに三段階に分けることができる。初期は2004年3月（一年次後期）～2005年3月（二年次後期）で、中期は2005年4月（二年次後期）～2006年3月（三年次後期）で、後期は2006年4月（三年次後期）～2007年5月（四年次後期）である。

³ 最初は37名であったが、四年過ぎた最終回で参加の学生数が26名となった。

男性 12 名、女性 28 名である。会話の時間は 20 分程度。ちなみに、インタビューには作文の内容についての確認、修正の部分も入っているため、書き言葉による作文からの引用・修正、教師による添削の復誦などを調査の対象外とした。

3.2 日本人母語話者における転訛形の使用データ

対照的に考察するため、丁寧体基調の会話における日本人母語話者の音声転訛の使用データを用いた。ボイクマン(2010)によると、転訛形によって、A)転訛形が基本であるもの、B)転訛形が原形を上回る／同程度であるもの、C)転訛形の使用率が原形を上回らないもの、D)転訛形の使用率が非常に低いもの、といった四つのレベルに分類できる。その転訛形の使用をまとめると表 1 のようになる。

表 1 丁寧体基調の会話における日本人母語話者の音声転訛の使用状況

A 転訛形が基本であるもの	
撥音化	のだ類→んだ類、こ/そ/あ/どのような／に→こ/そ/あ/どんな／に、 なにか→なんか（フィラー）、みな→みんな
音の変化	なんというか→なんていうか（フィラー）
拗音化	（それ）では→（それ）じゃ（接続詞）
B 転訛形が原形を上回る／同程度であるもの	
撥音化	いろいろな→いろんな、あまり→あんまり
単音の脱落	けれども→けど、ている類→てる類
促音化	という→っていう（文末）、というのは→っていうのは、 という＋名詞／形式名詞→っていう＋名詞／形式名詞、 というか／といいますか→っていうか／っていいいますか（フィラー）、 やはり→やっぱり
拗音化	では＋否定→じゃ＋否定、なければ→ななきゃ
C 転訛形の使用率が原形を上回らないもの	
撥音化	ので→んで（接続助詞）、ものだ類→もんだ類、なにか→なんか（疑問

	詞)、のところ→んところ、おなじ→おんなじ、
単音の脱落	ていく→てく、ところ→と
促音化	と＋本動詞→って＋本動詞、と→って（文末）、というのは→って、 こ/そ/あ/どちら→こ/そ/あ/どっち、くて→くって、
拗音化	てしまう→ちゃう、～ては→～ちゃ
D 転訛形の使用率が非常に低いもの	
撥音化	もの→もん（名詞）、なにも→なんも、V ら/れ/る（ない）・～る（の） →V ん（ない）・ん（の）
促音化	という＋名詞／形式名詞→って＋名詞／形式名詞、というのは→（っ） てのは、やはり→やっぱ、とても→とっても、（食べ）ても／（学生） でも→（食べ）たって／（学生）だって
拗音化	名詞＋では→名詞＋じゃ（複合名詞）、なければ→なけりゃ、こ/そ/あ れは→こ/そ/ありゃ

（ボイクマン 2010 を元に筆者が作成）

4. 調査の結果

分析にあたっては、台湾人インタビューによる原形と転訛形の使用率について調査した。また、主にボイクマン（2010）を参照し、本データでの結果との比較を行なった。

4.1 A 類の使用状況

A 類は転訛形が基本（90%以上）であるもの（ボイクマン 2010：32）である。台湾人日本語学習者の使用状況は表 2 のような結果になった。

表 2 台湾人日本語学習者における A 類の使用状況

原形⇔転訛形	使用率（延べ語数総数）
のです・のでしょう⇔んです・んでしょう	10.0%（43）⇔90.0%（386）
のだ・のだろう⇔んだ・んだろう	3.8%（2）⇔96.2%（51）

のではない⇔んではない	100% (2) ⇔0% (0)
のじゃない⇔んじゃない	6.7% (1) ⇔93.3% (14)
こ/そ/あ/どのような／に⇔こ/そ/あ/どんな／に	8.0% (38) ⇔92.0% (448)
なにか⇔なんか (フィラー)	1.5% (9) ⇔98.5% (585)
みな⇔みんな	4.0% (14) ⇔96.0% (346)
なんというか⇔なんていうか (フィラー)	44.4% (8) ⇔55.6% (10)
(それ) では⇔(それ) じゃ (接続詞)	1.0% (3) ⇔99.0% (400)

(「では (じゃ) ない」は丁寧形、過去形を含む)

本データで「んではない」という形の使用例はなかった。堀口 (1989)、ボイクマン (2010) においても同様の結果が示されている⁴。また、表中のフィラー⁵と呼ばれる音の変化「なんというか→なんていうか」以外の、使用率は先行研究 (堀口 1989、福島・上原 2004、ボイクマン 2010) と同様に、転訛形が約 90% 以上の割合で使用されている。話し言葉では撥音化の「んだ類」(例文 1)、「なんか (フィラー)」(例文 2)、「んな／に」(例文 3)、「みんな」(例文 4) と拗音化の「(それ) じゃ (接続詞)」(例文 5) といった転訛形が基本になっており、学習者が習得していると言える。つまり、これら転訛形が原形の使用を大いに上回っており、改まり度が落ちることのない形として認識・使用されていると見てよいであろう。

(1) みんなやってるんだよ。(20051206¥J0307191.txt (69, 10))

(2) あ〜。(あ〜) なんか 30 歳まで結婚したいけど。

(20070516¥J2635331.txt (200, 10))

(3) うーん、そんな おおく、うーん、たぶん 3 人まで産まないんじゃない

⁴ 堀口 (1988)、ボイクマン (2010) においては「のじゃない」の使用例もなかった。本データには 1 例ある。

⁵ 山根 (2002: 49) によると、フィラーとは、「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係を持たない。発話の一文を埋める音声現象」であるという。

い。(20070307¥J3225311.txt(55,8))

(4) (笑) 多分、えーと、みんな、えーと、他の惑星、に住んでいるかも
しれません。(20061018¥C0335271.txt(33,13))

(5) じゃ、先輩はその四年間の感想を言ってみようか(笑)。
(20070516¥C2406331.txt(34,3))

ただし、フィラーの「なんていうか」に関しては、母語話者による原形の使用は皆無であったが、本データでは原形とほぼ同程度の率で使用されている。使用率の高さを考慮すると、丁寧体基調の会話においては、転訛形が使用されたからと言って改まりに欠けるわけではないということは認識されていないと考えられる。しかし、総数が18例と少ないため、さらに多くのデータによる検証が必要である(例文6)。

(6) ん、ん、なんていうか、なんか、ぜんぜん33歳に見えない(はい)くらい若くて(うん)綺麗な(うん)先輩でした。(20070516¥C3801331.txt(61,7))

4.2 B類の使用状況

B類は転訛形が原形を上回る／同程度(50%～80%程度)であるもの(ボイクマン2010:32)。台湾人日本語学習者の使用状況は表2のような結果になった。

表3 台湾人日本語学習者におけるB類の使用状況

原形⇔転訛形	使用率(延べ語数総数)
いろいろな⇔いろんな	80.3%(273)⇔19.7%(70)
あまり⇔あんまり	73.4%(496)⇔26.6%(180)
けれども⇔けど	4.0%(37)⇔96.0%(896)
ています⇔てます*	87.4%(610)⇔12.6%(88)
ている⇔てる*	72.7%(667)⇔27.3%(251)

ていない⇔てない＊	48.3% (142) ⇔ 51.7% (152)
ていて⇔てて	72.8% (67) ⇔ 27.2% (25)
という⇔っていう (文末) ◎	82.1% (23) ⇔ 17.9% (5)
という＋名詞／形式名詞⇔っていう＋名詞／形式名詞◎	95.2% (335) ⇔ 4.8% (17)
というのは⇔っていうのは◎	86.8% (33) ⇔ 13.2% (5)
というか／といいますか⇔っていうか／つていいですか (フィラー) ◎	0% (0) ⇔ 100.0% (2)
やはり⇔やっぱり	19.2% (69) ⇔ 80.8% (291)
では＋否定⇔じゃ＋否定	35.1% (279) ⇔ 64.9% (515)
なければ⇔なきゃ	87.9% (124) ⇔ 12.1% (17)

(＊は過去形を含む。◎「って」が「て」と発話されることもある)

表 3 から分かるように、B 類における学習者の使用には三つのグループに分けられる。

第一に、母語話者と同様に使用率は 50%～80% 程度であり、転訛形が原形の使用を上回ったものとして、「ていない→てない」「やはり→やっぱり」「では＋否定→じゃ＋否定」が挙げられる (例文 7、8、9)。これらは、学習者に頻繁に使われているため、丁寧体基調の会話において使用されても改まりの度合いが顕著に下がるものではないと認識されているようである。

(7) ありまして (お)、でも、その出生率、その数字の方ははっきり覚えてない。(20070307¥J1724311.txt(10, 34))

(8) でも、やっぱり日本で仕事するのは大変だよね。(うん) 女の子としては。(20051123¥J1618181.txt(143, 6))

(9) う～ん、数学じゃない。私の数学は下手です、超下手。だから…。(20070411¥J2635321.txt(74, 9))

第二に、母語話者より転訛形が多く使用されたものである。その中で、「けど」⁶の転訛形使用率は、福島・上原（2004）では83%、ボイクマン（2010）では40%程度であった。本データでは「けど」の生起率は96%と「けれども」を大きく上回っており、その使用によって改まりの度合いが欠けると印象を与えることはない、ということが学習者に十分に認識されていると言えよう（例文10）。また、フィラーの「(っ) ていうか／っていいいますか」のような表現は転訛形が固定されている傾向があるが、本データで観察されたのは総数2例のみ観察であり、断定するにはさらに多くのデータによる検証が必要である（例文11）。

(10) 披露する。(笑) んー、えー、そんなすごい(んー)、ものではないですけど。(20061122¥J1618281.txt(97,36))

(11) あの、台湾の議員は、あのう…っていうか、彼らは、あのう、ただお金を儲けることを考え、しかないんだから(うん)、私はそんな人に投票したても、あのう…。(20051206¥C0216191.txt(9,19))

第三に、母語話者による使用率は転訛形が原形を上回るか、同程度使用されるが、台湾人学習者のデータでは原形が転訛形を上回るものとしては、「いろいろな⇔いろんな」の原型の使用率が高い（ボイクマン2010では78%程度）。また、「あんまり」の使用率は原形に拮抗している（ボイクマン2010では44%程度）。台湾人学習者のデータでは転訛形の使用率はいずれも高くなり、それぞれ19.7%と26.6%である（例文12、13）。

(12) うん、考え、考えましたが(うん)、いろんな仕事も考えました。(うん) えーと、困ります。(20060614¥C0405251.txt(46,21))

(13) うん、たぶん。日本語を勉強したら、してから、自分は日本語をあ

⁶ 本データにおいて、「けれども」の転訛形は「けど」のほかに、「けれど」28例と「けども」4例も検出される。

んまり好きじゃないと…という気がします。(20060104¥J1924201.txt(153, 32))

さらに、「ている」類の「い」音の脱落について、本データでは、「てない」の転訛使用率は 52%程度と原形に拮抗しているが、ボイクマン (2010) のデータにある 78%程度には及ばない (例文 7)。「てない」を除く「ている」類の「い」音の脱落は、日本人母語話者の転訛形使用率が 54%~72%程度であり、転訛形が原形の使用を上回った (ボイクマン 2010)。しかし、本データでは逆に原形が転訛形の使用を上回っており、転訛形の使用率は約 13%~27%と高くはない (例文 14)。

(14) えっと、お正月を迎えるために、えっと、新しい希望とか計画とかを立てました。(20050302¥C1921111.txt(65, 35))

また、ボイクマン (2010) のデータにおいて、促音化の「っていう (文末)」と「っていう+名詞/形式名詞」及び「っていうのは」はその使用率が原形である「という」を上回り、本データでは転訛形の使用率は 4%程度~18%と、やや低い (例文 15、16、17)。

(15) (笑) もう随分もう強くなっているっていう。(笑)
(20070307¥C3801311.txt(224, 19))

(16) うーん、自分が前に、あの一、リーダーっていう経験があって (うん、うん) うん。(20051206¥J0429191.txt(293, 21))

(17) 顔は…まあ、気にしないていうのは嘘だけど (うん)、嘘ですけど。
(20070411¥C3801321.txt(98, 15))

なお、拗音化の転訛形「なきゃ」は、先行研究では原形を上回る使用率であった (堀口 1989 では 72%、ボイクマン 2010 では 55%)。一方、本データでは使用率が 12.1%と低く、その使用が著しくくだけた印象を与えるものではないということが十分に認識されてい

いようである（例文 18）。

（18）あつ、美麗華はバスに乗らなきや。（20060426¥C2406231.txt (28, 15)）

4.3 C 類の使用状況

C 類は転訛形の使用率が原形を上回らない（15%～40%程度）ものである（ボイクマン 2010：32）。表 4 に台湾人日本語学習者の使用状況を示す。

表 4 台湾人日本語学習者における C 類の使用状況

原形⇔転訛形	使用率（延べ語数総数）
ので⇔んで（接続助詞）	94.6%（175）⇔5.4%（10）
ものです／ものだ⇔もんです／もんだ	0%（0）⇔0%（0）
なにか⇔なんか（疑問詞）	99.4%（339）⇔0.6%（2）
のどこ（ろ）⇔んどこ（ろ）	100%（129）⇔0%（0）
おなじ⇔おんなじ	99.4%（315）⇔0.6%（2）
ていく／ていって⇔てく／てって◎	100%（29）⇔0%（0）
ところ⇔とこ	97.3%（293）⇔2.7%（8）
と＋本動詞⇔って本動詞	97.6%（1728）⇔2.4%（42）
と⇔って（文末）	54.5%（48）⇔45.5%（40）
というのは⇔っていうのは	86.8%（33）⇔13.2%（5）
こ／そ／あ／どちら⇔こ／そ／あ／どっち	29.8%（34）⇔70.2%（80）
てしまう⇔ちゃう*	18.7%（20）⇔81.3%（87）
～ては⇔～ちゃ	95.9%（47）⇔4.1%（2）

（◎は否定形、過去形、過去否定形を含む。＊は丁寧形、過去形、否定形も含む。）

接続助詞「ので」の転訛形「んで」の使用率は、先行研究ではデータによって異なるものの、ある程度あることが分かった（堀口

1989 では 58%、ボイクマン 2010・小磯他 2005 では 26%程度)。丁寧体基調の話し言葉において転訛形が使用されても、改まり度が極端に落ちるわけではないということが言えるが、本データでは原形の使用率が高い結果となった(例文 19)。そして、実質的な意味を持つ疑問詞「なんか」の場合でも、母語話者の原形「なにか」の使用率のほうが高かったが(ボイクマン 2010)、本データでは転訛形の使用率はさらに低く、0.6%である(例文 20)。また、「のところが」「んところ」となる変化については、小磯他(2005)における転訛形の生起率は 7%であり、ボイクマン(2010)で 22.2%の使用率があったが、使用例は 4 例しかなく、本データでは転訛形の使用例が皆無であった。なお、撥音化の転訛形「おなじ→おんなじ」の使用割合は非常に低い(ボイクマン 2010 で 20 例中 3 例)、本データにおける転訛形の使用率はさらに低く、0.6%(317 例中 2 例)である(例文 21)。

(19) 体験、したこともないんで(んー)、んー、その後も自分好きで、子供を生んで、大変なのは自分じゃないですね。

(20070411¥J3225321.txt(89, 13))

(20) (笑) えっ、うー(笑) えーと、あーなんかどうか変です。(うん) えー。(20040414¥C2133021.txt(41, 20))

(21) 私達は随分嬉しかったです。それから一番最後は「とても楽しかったです」。(ああ) おんなじ? (はい) ふうん、そうかあ。ううん。

(20040317¥J0124011.txt(31, 42))

また、「ていく→てく」は「ている」の「い」音の脱落よりも使用率は高くない結果であった(堀口 1989、ボイクマン 2010 とともに 22%程度)が、本データでは転訛形の生起率はゼロという結果になった。転訛形「とこ」の母語話者の使用率は 20%弱と高くないが(ボイクマン 2010)、本データではさらに低く、3%程度である(例文 22)。

(22) 一番好きなところは私の部屋です。(20040505¥C0911031. txt(119, 8))

本動詞（言う、思うなど）が後続する場合の促音化「って」の母語話者の使用率は、13.5%と高くはないが（ボイクマン 2010）、本データではさらに低く、2.4%である（例文 23）。一方、文末にくる転訛形「と→って」において、母語話者はその使用率が低く、11.8%であったが、台湾人学習者は、原形と同程度の割合で使用しており、使用過剰の嫌いがある（例文 24）。これと対照的に、主題を表す「というのは」が「っていうのは」に転訛することが母語話者に頻繁に使用されている一方（ボイクマン 2010 では 59.6%）、本データでは 13.2%（総数 5 例）と、使用率は低い（例文 25）。

(23) う…なんというか、あの、その友達は、あの、ちょっと、あの私の考えを聞いて、うん、あまり気にしないって言って。

(20060104¥J1334201. txt(25, 53))

(24) 母、この人に投票します。（本当）私に必ずこの人、投票してって。

(20051206¥C3820191. txt(20, 31))

(25) 暇もない。ぼんやりっていうのは、はっきり、じゃない？

(20060104¥J1924201. txt(19, 13))

また、「こ／そ／あ／どちら」が「こ／そ／あ／どっち」となる転訛は、母語話者のその使用が 30%を超えているが、原形を上回るほどではない（ボイクマン 2010）。しかし、本データでは転化形の使用が 70.2%とかなり頻繁に使用されるという結果になった（例文 26）。

(26) はい。台湾、台湾、え、国内旅行か（うん）海外旅行か（うん）、どっち選ぶ、選びま（うん）、選ぶことができません。（うん）困ります。

(20060614¥C0405251. txt(8, 33))

なお、「てしまう」の転訛形「ちゃう」は、台湾人学習者のデータでは使用率が 81.3% とかなり頻繁に使用されている。ボイクマン (2010) では使用率 35.6% で本データと異なる結果であったが、堀口 (1989) の 68%、福島・上原 (2004) の 90% 以上とほぼ同様の結果となっている (例文 27)。しかし、「ては」の転訛形「ちゃ」の転訛形については、堀口 (1989) とボイクマン (2010) ではともに 35% 程度であったが、本データでは使用例数が少なく、49 例中 2 例である (例文 28)。

(27) 日本人の先生ですけど。(あー、はい) 名前ちょっと忘れちゃった。
(うんー) あれ、確か…。(20060614¥C3801251.txt(96, 29))

(28) 対応策か。(うん) うーん……捨てちゃだめ。
(20070103¥C0216301.txt(8, 19))

ちなみに、「ものだ」類の意味用法には「過去の回想」「当然」「理由を表す」などがあるが、本データでは原形も転訛形も見られなかった。

4.4 D 類の使用状況

D 類は転訛形の使用率が非常に低い (0% ~ 5% 程度) ものである (ボイクマン 2010 : 32)。台湾人日本語学習者の使用状況は表 5 のような結果になった。

表 5 台湾人日本語学習者における D 類の使用状況

原形⇔転訛形	使用率 (延べ語数総数)
もの⇔もん (名詞 ; 高い~)	100% (39) ⇔ 0% (0)
なにも⇔なんも	100% (82) ⇔ 0% (0)
(わか) らない⇔(わか) んない	95.5% (727) ⇔ 4.5% (34)
(かもし) れない⇔(かもし) んない	100% (315) ⇔ 0% (0)

という＋名詞／形式名詞⇔って＋名詞／形式名詞	100% (335) ⇔0% (0)
というのは⇔（っ）てのは	100% (33) ⇔0% (0)
（どうなって）る（の）⇔（どうなって）ん（の）	100% (1) ⇔0% (0)
やはり⇔やっぱ	93.2% (69) ⇔6.8% (5)
とても⇔とっても	90.2 (377) ⇔9.8% (41)
（食べ）ても／（学生）でも→（食べ）たって／（学生）だって	100% (357) ⇔0% (0)
名詞＋では⇔名詞＋じゃ（複合助詞）	100% (113) ⇔0% (0)
なければ⇔なけりゃ	100% (43) ⇔0% (0)
こ／そ／あれは⇔そりゃ	99.9% (758) ⇔0.1% (1)

表 5 から分かるように、D 類において台湾人日本語学習者は母語話者とほぼ同様の使用状況があらわれている。さらに詳しく観察すると、台湾人日本語学習者による転訛形の使用実態を次の四種類に分けることができる。

1) 母語話者とほぼ同程度使用されるもの。「らない→んない」の転訛形の使用率は 4.5% で、ボイクマン (2010) の 7.5% とほぼ同様の結果となっている。ちなみに、学習者による転訛形のうち、「変わんない」1 例のほかはすべて「分（わ）かんない」である（例文 29）。また、「こ／そ／あれは→こ／そ／ありゃ」の転訛形使用率は 0.1% でボイクマン (2010) の 1.7% とほぼ同様の結果となっている（例文 30）。

(29) これは、なんか政治人物、まあ、わかんないよ、政府の人たちが（うん）、なんか操作（中国語）、そう操作（中国語）。

(20060927¥C4415261. txt (37, 20))

(30) うん。でも、そりゃ、あまりないですね。

(20061122¥J2304281. txt (31, 10))

2) 両者ともに転訛形が使用されないもの。実質名詞の「もの→もん」は、本データではボイクマン（2010）と同様、すべて原形が用いられ、転訛する例は見られなかった。これと同じく、「なにも」に対する転訛形「なんも」も1例も観察されなかった。「れ（ない）→れん」の変化は、本データでも先行研究と同様全く使用されないという結果になった。「なければ」の転訛形には「なきゃ」と「なけりゃ」の二種類があるが、「なきゃ」は原形を上回る使用率である（B類）一方、「なけりゃ」はボイクマン（2010）の結果と同様1例も観察されなかった。これらの転訛形はくだけた印象を与えるため、学習者のデータのように、丁寧体基調の会話では、全く使用されないものと考えられる。

3) 母語話者よりやや多く使用されるもの。ボイクマン（2010）で「やはり→やっぱ」及び「とても→とっても」の使用率はともに低く、1.8%であったが、本データではより高く、6.8%と9.8%という結果になった。原形から大きく異なっている「やっぱ」と、強調を表す際の促音の追加「とっても」はくだけた印象を与えるため、使用率が低かったことが分かった（例文 31、32）。

(31) やっぱ産みたい。(20070307¥J1334311.txt(37, 6))

(32) うんー多分天気がとっても寒いから。

(20070103¥J2528301.txt(29, 11))

4) 母語話者の使用率が非常に低く、台湾人日本語学習者の使用例は皆無であるもの。前に述べたが、名詞／形式名詞が後続する場合、「という」より「っていう」の使用率が高くなり、B類に分類されている。しかし、本データではその使用率が極めて低い。一方、「っていう」をさらに短縮した「って」の使用率は極端に落ち、4.1%である（ボイクマン 2010）。これに対して、本データでは1例も見られなかった。「というのは」が名詞／形式名詞が後続する場合と同様、

「っていうのは」は頻繁に使用される形式であるが、「(っ)てのは」の使用率は極端に3.4%と下がる(ボイクマン 2010)。これに対して、台湾人日本語学習者のデータでは1例も観察されなかった。また、「る」が「ん」、「(食べ)ても／(学生)でも」が「(食べ)たって／(学生)だって」となる現象は、ボイクマン(2010)ではともに1回だけ観察されたが、本データでは全く使用されないという結果であった。さらに「名詞＋では→名詞＋じゃ(複合助詞)」では、先行研究(福島・上原 2004、ボイクマン 2010)では使用率が低く、転訛形はくだけた印象を与えることを指摘している。本データではその使用例が皆無である。

5. 考察

本節では、4節で示した結果をまとめ、日本語教育への示唆につなげたい。まず、調査の結果、次の2点の考察結果を得られた。

1) A類(母語話者による転訛形が基本(90%以上)であるもの)とD類(母語話者による転訛形の使用率が非常に低い(0%~5%程度)もの)において、台湾人日本語学習者の転訛形使用率は母語話者とほぼ同様の状況が見られる。つまり、転訛形の割合が非常に高いカテゴリーと、原形が専ら使用されるカテゴリーにおいては、学習者がその改まり度を基本的に認識していると言える。

2) B類(母語話者による転訛形が原形を上回る／同程度(50%~80%程度)であるもの)とC類(母語話者による転訛形の使用率が原形を上回らない(15%~40%程度)もの)において、台湾人日本語学習者の転訛使用率は母語話者の使用状況とずれる項目が比較的多い。つまり、中間レベルに位置する転訛形の形と意味の認識が十分になされていないと考えられる。

上述結果に基づき、日本語の教育現場へは次のような示唆が得られた。

1) A類は基本と言えるほどかなり高い頻度で母語話者によって使用されている転訛形であり、B類も原形を上回るか同程度使用され

ている転訛形であることから、転訛形を使用したからと言って改まり度が低下することはないと言える。このような転訛形の使用率が高い表現項目は日本語教育で積極的に取り入れるべきである。例えば、撥音化に関して、母語話者の使用例の中では「いろんな」「あんまり」「なきゃ」といった転訛形が頻繁であるため、日本語教育では原形の「いろいろな」「あまり」「～なければいけない／ならない」とともに導入したほうがよい。特にフィラーの「なんていうか」のような表現が固定されており、くだけた印象を与えることがないということは、学習者への説明が必要である。なお、今回取得したデータに限って言えば、学習者の使用は教師からの影響が大きいと考えられる（例文 33、34）。そのため、教師がこれらの転訛形を教材として積極的に導入するだけでなく、学習者にその用法について明確に説明したり練習させたりすることは話し言葉教育に多大に役に立つことができると考えられる。

(33) 教師：ふーん。野菜はどんな野菜を入れるんですか？決まってますか？（20061122¥J1618281.txt(114, 27)）

(34) 学生：えー、はい決まってます。えー、何て言う？芹菜（中国語）。（20061122¥J1618281.txt(115, 11)）

2) C 類は転訛形が原形を上回らないものである。その改まりの度合いはやや落ち、くだけた印象を与える可能性があると考えられる。台湾人日本語学習者の使用から見れば、文末に来る転訛形「と→って」や「こ／そ／あ／どちら→こ／そ／あ／どっち」は使用過剰の嫌いがある。一方、主題を表す「っていうのは」を効果的に使用できないことが観察された。学習者を指導する際に留意する必要がある。

3) D 類の転訛形は、くだけた印象を与えるため、丁寧体基調の会話ではほとんど使用されないものと考えられる。母語話者の実際の使用例は少なく、日本語教育では特に取り上げる必要がないと考え

られる。本データにおいても全体的に台湾人日本語学習者の使用例がほとんどないが、「やはり→やっぱ」「とても→とっても」のように、母語話者よりやや多く使用されるものもあるため、その転訛形の使用を抑えるよう指導することは大切である。

4) 日本人母語話者の発話の中では一定の程度で使われているのに対して、台湾人学習者の発話にはその傾向があまり見られない転訛形がある。具体的には接続助詞の「んで」、「のところ」が「るところ」となる変化、「ていく→てく」、「ところ→とこ」、「って+本動詞」、主題を表す「っていうのは」「ってのは」、「ては→ちゃ」、「もんだ」類、「っていう／って+名詞／形式名詞」、「名詞+では→名詞+じゃ（複合助詞）」などが挙げられる。これら転訛形は発話しなくても、日本人母語話者と会話する際に聴覚上支障を招く可能性が高いことを考えると、積極的に指導してよいと言えるであろう。指導面においては、初級から聴解に重点をおいて練習をすることを勧める。中級、上級以降、今度は口頭の運用練習を強化する。理解から運用に至るまで、順を追って漸進するよう提言したい。

6. おわりに

本稿では、台湾人日本語学習者 37 名の丁寧体基調の会話をデータとして、どのような音声転訛形が見られるのか、またそれらの転訛形は原形に対してどの程度使用されているのか、日本人母語話者のデータを参照しつつ考察した。今後の課題として、転訛形の使用は個人差が見られるのか、初、中、上級にわたってどう変化するのかを縦断的に考察したい。また、転訛形に関する筆記と聞き取りテストを行ない、本稿で明らかになった転訛形の運用能力と結果が一致するかどうか今後検証を進め、これについて、日本語教育学的な考察を含めて、まだ明らかになっていない部分も多いため、今後さらに転訛形の語例を収集し追究していきたい。

参考文献

- 小磯花絵・間淵洋子・前川喜久雄（2005）「助詞の撥音化現象：『日本語話し言葉コーパス』を用いた音声転訛現象の分析」『人工知能学会研究会資料 言語・音声理解と対話処理』、人工知能学会、7-12 頁
- 斉藤純男（1991）「現代日本語における縮約形の定義と分類」『東北大学日本語教育研究論集』6、89-97 頁
- 陳淑娟（2005）「「隨後訪談」對作文的修正效應--依據 LARP at SCU 之語料調查」『語文與國際研究』2、1-34 頁
- 陳淑娟（2006）「作文における語彙習得についての一考察--使用語数と語類の変化を中心に」『東吳日語教育學報』29、29-63 頁
- 東会娟（2006）「会話コーパスに見る中国人日本語学習者の縮約形の使用状況」『言葉と文化』7、51-66 頁
- 東会娟（2008）「中国人上級日本語学習者の縮約形の使用状況」『言葉と文化』9、343-356 頁
- 東会娟（2009）「中国の大学日本語教育における縮約形の指導について」『言葉と文化』10、151-164 頁
- 土岐哲（1975）「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』28、55-66 頁
- 福島悦子・上原聡（2004）「丁寧体の会話における縮約形使用に関する一考察—日本語の母語話者と学習者の会話を比較して—」『東北大学大学院国際文化研究科論集』12、121-130 頁
- ボイクマン総子（2010）「丁寧体の会話における日本語母語話者の音声転訛」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』25、17-35 頁
- 堀口純子（1985）「話しことばに迫る」林四郎編『応用言語学講座Ⅰ 日本語の教育』明治書院、250-268 頁
- 堀口純子（1989）「話しことばにおける縮約形と日本語教育への応用」『文芸言語研究言語篇』15、99-121 頁
- 嶺岸玲子（1999）「日本語学習者への縮約形指導のめやす」『日本語教育』102、30-39 頁

山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版